

# 東京フィールドワーク

7月21日～23日まで、抽選で選ばれた20名で東京でのフィールドワークを行い、JICA、国連開発計画（国連大学）、創価大学、国会、外務省などを訪問した。

## 1 事前準備

事前準備として、20名を5グループにわけ、「国連人道サミット」「国連開発計画」「JICA」「SDGs」「外務省」を調べた。その内容をジグソー法で4グループの中での発表を行った。さらに、一人ずつのテーマを設け、調べたいことを考えた。

## 2 7月21日（1日目）

ここからは生徒の報告をもとに、毎日を振り返っていく。

（JICA）

JICA地球ひろばを訪問し、職員の北島さんによるプレゼンテーションが行われた。また、昼食は世界のランチを食べ、さらに展示の見学の研修を行った。

「私たちはJICAを訪問し、JICAの北島さんが私たちにプレゼンを行ってくださいました。プレゼンの中で、JICAの行う国際協力を魚釣りの話の例を通して、途上国の人々自らの手による努力を支援すること、すなわち自助努力支援であるとの話をされていました。また北島さん自身も青年海外協力隊としてエチオピアに体育教員として行かれた話もしてくださいました。」

「JICAの北島さんが私たちにプレゼンを行ってくださいました。プレゼンの中でJICAの行う協力を魚釣りの名人の話の例を通して、途上国の人々自らの手による努力を支援すること、すなわち自助努力支援であるとの話をされていました。また北島さん自身も青年海外協力隊としてエチオピアに体育教員として行かれた話もしていただきました。」

「JICA地球ひろばのたくさんの展示がある会場では様々な世界中の問題、例えば貧困や学校に行けない子供たちのこと、発展途上国における女性差別問題をクイズやゲーム形式で楽しく学べる展示がありました。クイズラリーのように、会場をまわっていく中で、楽しみながらも真剣に世界中の様々な問題と向き合うことができました。」

「研修後の昼食は主に世界の料理のランチでした。バターカレーやクスクスといった食べたことのない料理でしたが、新感覚で食べやすく、とてもおいしい料理でした。また、この昼食でフィールドワークの仲間たちと友情を育むことができました。」

（国連開発計画（国連大学））

移動し、国連大学にある国連開発計画を訪問、近藤代表による講義や国連大学のライブラリーのツアーを行った。

「UNDPとは、いい国を作るための手助けをする国連の機関で、このUNDPについて講義してくれました。目標をたてて貧困層を半分以下にしたり、民間企業と協力して新たなビジネスモデルを作ったりしているそうです。」

「国連開発計画（United Nation Development Program）では、開発途上国の方に技術を教え、実際に行動を起こすことができるように支援を行います。また、その国の可能性を引き出して、開発によってよい連鎖や価値の連鎖を生むために活動しています。」

（UNDPの魅力とは？）

もともと外務省に努められていた近藤哲夫駐日大使は語ってくださいました。『国連の方が、JICA・外務省に比べて忠実に働くことができる。また、紛争国や発展途上国、貧しい人に寄り添える、現場で実際に肌身に感じながら活動できることが素晴らしい』と。

（今後のUNDP）特に女性のエンパワーメントを中心に考えられているようです。」

「1975年国連大学が始まる 国連総会の記録が1946年からあり、公式記録は9巻までである。公用語は英語とフランス語。国連大学は14か国にある。英語中心の本。電子書籍は7万冊あり、メリットは海外にある研究所を借りることができること。」

あることを知りたいと思ったとき、この本にその情報が正しく載っているとは限らないから、関連する本を選び、その情報源が正しいのか見極めることが大事だと教えていただきました。」

(創価大学)

夜は宿泊先である創価大学において、GCP（グローバルシチズンシッププログラム）で学ぶ本校卒業生と懇談を行った。

「夜には創価大学で、関西学園の卒業生である GCP の卒業生にお話を伺いました。質疑応答形式で GCP のほかにも学園生時代や留学について、また、専攻している経済学についてなど、貴重なお話をおききすることができました。」

「GCP とは学部横断型で看護、国際教養以外の学生によって、2年間は英語を徹して学ぶ授業でプレゼンや統計学を学ぶ。3年次に自分が行きたいと思った国に留学ができる。」

GCPに入る前、自分の将来の夢が明確ではなかったが、GCP でやりたいことを見つけられ、国語の教師を目指している。GCP で英語力を身に着けたことで、格段と視野が広がったといわれた。」

### 3 7月22日（2日目）

(創価大学)

創価大学、看護学部佐々木諭教授、山口寿男客員教授による講義が行われた。

「ボスニアやザンビアなどで従事されてきた経験から国際保健について教えていただきました。保健・医療サービスの整っていない国では、自分たちの健康は自分たちで守る「住民参加」型のサービスを実施していると知りました。また、難民については「自国に帰ること」がゴールと知り、そのためには政治的・治安的に安定した国づくりが必要と学びました。」

「佐々木先生が実際に訪れられたボスニアとルワンダの国の現状やNGOでの活動を通して、現地の今の状況や貧困の深刻さを身に染みて知ることができ、貧困地域には先進国の技術を教えることが一番大切だということを学びました。」

「創価大学1期生で、外務省に入られた山口先生にお話を伺いました。まずは創大1期生として、たくさんの貴重なお話を聞くことができました。外務省時代のイラク大使をしていたときの最前線のお話もしていただきました。」

(国会)

国会に移動し、参議院の杉久武議員との懇談会と議事堂見学をした。

(外務省)

外務省の見学と、国際会議室でSDGsについて対応された職員の伊藤さんのお話をきかせていただいた。

「私は事前学習で外務省について調べましたが、改めていかにすごい職業か感じることができました。みんなのやりたいをサポートするために、日本と世界の平和を守る仕事をしているというのに、すごく感心しました。国と国の外交を担当するだけでなく、日本の利益を守り、日本人の保護もおこなっていると知り驚きました。」

「(SDGs とは) 持続可能な開発目標の事ですべての国を対象とした国際社会全体の目標です。17の目標とそれに属する169のターゲットで構成されています。1から6までの目標はMDGsをより大きな目標にしたもので7から17までの目標は新たに設定された目標です。外務省の伊藤さんのお話では16の目標が最も難しいとおっしゃっていました。目標達成のゴールは今も討議されています。」

### 4 7月23日（3日目）

(平和記念展示資料館)

3日目は新宿にある平和記念展示資料館を訪問、展示を説明していただき見学を行った。

「平和記念展示資料館では主に兵士、戦後強制抑留者、海外からの引揚者の3つの労苦について展示されていました。シベリア抑留などの今まで詳しく知らなかったことが学べ、平和への思いが高まりました。」

(戸田記念国際会館)

最後に、戸田記念国際会館に移動し、世界人道サミットの際に展示活動などを行ったSGIの浅井さんのお話を聞かせていただいた。

「戸田記念国際会館では、世界人道サミットについて、いつ、どこで、何のためにサミットが行われたのか。また、当日になるまでの準備期間の活動や背景についても詳しく教えていただきました。その中でも SGI は、取り組みの一つとして人道展「人間の復興」という展示会を開き、多くの団体と協力して、高い評価を得ました。他の宗教団体や NPO とは違って、地域や 1 人 1 人をベースに活動を行っていることに感銘しました。」

## 5 生徒レポート

現在、世界が置かれている開発問題を見据え、国際貢献のために将来自分に何が出来るのか・何をすべきなのかを探求する。

1 年 3 組 10 番 田中義幸

### 1. テーマに関する具体的な説明、理由

貧困地域で人々が、平和で最低限の生活を送ることが出来るようになるまでには、まだまだ解決しなければならない課題がたくさんある。例えば、水や食料の不足、難民問題、衛生環境の問題などがあげられる。

今回のフィールドワークに参加するにあたり、こういった開発問題をメインにこれらの諸問題を見定め、この機会を通して、世界が何を求めているのか、その求めに対して自分がどのように問題解決に関わって取り組んでいくことができるのかを考えたいと思い、このテーマを設定した。

### 2. 行く前に知っていたテーマに関する知識

貧困地域での課題を事前学習で調べていく中で、難民問題が大きな割合を占めていると感じた。

難民問題は開発問題に隣接しており、近年特に注目を浴びている。

難民問題を解決することによって、難民をかかえている国は頻発する紛争を減らすことができ、治安を安定させることが出来ると考えられる。

また、昔から一般的に知られる開発に関わる問題として環境問題がある。

開発途上国が発展するためには産業を興し、国の利益となるものを生産しなければならない。外国との貿易や国内での商品・サービスの売買などが増えて経済が潤う。

しかし、経済の発展する過程では公害という困難に見舞われる。日本も 1960 年代から 70 年代にかけて公害が多発し、その影響で計り知れない数の生命が奪われたり公害病の後遺症で苦しむ患者が多発したという悲しい歴史的事実がある。

近年では中国が同じように公害問題を抱え、日本にも毎年のように光化学スモッグがおこるなどの被害をもたらしている。

この問題を解決するためには、公害問題に苦しむ国が自ら努力するだけでなく、日本を含めて先進諸国や国際機関が資金や技術面での支援をすることが必要となってくる。

### 3. フィールドワークで聞こう、学ぼうと思っていたこと

・ JICA (北島さん)

自分の希望した国に行かれたのか。エチオピアに渡って感じたこと。

・ 国連大学・国連開発計画 (近藤さん)

UNDP として実際にした行動は何なのか。持続可能という言葉の意味。

・ 国会 (杉さん)

高校生がさらに国政に関心を持ち、世間に混在している間違った情報と正しい真実とを見極めていくためにはどうすれば良いのか。

・ 外務省 (伊藤さん)

必要とされる外交政策の例。世界津波の日がなぜ 11 月 5 日なのか。

・ 創価大学 (GCP 生の方)

なぜ GCP に入ろうと思ったのか。GCP に参加してメリットになったこと。

・ 創価大学 (講義/佐々木先生、山口先生)

発展途上国に安全な水を供給するための方法。IS と難民問題の繋がり。

・ 戸田記念国際会館・世界人道サミット (浅井さん、森本さん)

サミットが開催されるまでの背景。参加された難民の方々がサミットで行ったこと。

#### 4. テーマに関して、現地で聞いてみようと思ったこと、見ようと思っていたこと

JICA や平和記念展示資料館を訪問するにあたり、展示物から貧しい生活をしている人たちの願いや希望というものを感じ取りたいと思った。

また、国会を見学するにあたり、日本が国際社会に寄与する取り組みとともに、どのような場所で国内の発展のための政治を行っているのかを見ようと心掛けた。

テーマの内容を直接聞くことはしなかったが、中東アジア地域周辺での水不足やまだまだ未整備のインフラの現状を見て、どうすることがその地域を豊かにすることに繋がるのか聞いてみようと思った。

さらには、実際に途上国で活動された実績のある方々のお話を伺って、国際貢献とはどのようなものだと考えておられるのか聞いてみようと思った。

#### 5. フィールドワークで聞いたこと、学んだこと、そこから提案できること

JICA：世界の人口（約73億人）のうち60億人以上の人（約8割）は開発途上国に住んでいると聞いた。また、その中のほとんどは若者だということも知った。言い換えれば貧困に苦しむ人たちの多くが若者だということだ。

このことから教育制度を改革し、さらに促進していくべきだと思う。確固たる教育環境が築かれれば、教育を受けた若者が将来政治的にその国をリードしていく指導者、又は病気で苦しむ人々を助ける医師となり、国の発展に寄与してくれると考えられる。

また、井戸を掘ったり道路や橋を架ける技術者や学校の先生など、途上国を支えるあらゆる職業の人たちの能力が向上して、国を発展させてくれるだろう。

教育を受けない若者は、単純な労働をするぐらいしかないが、たとえば農業に従事して作物をつくるとしても、単に作物をつくるだけでなく収穫量を上げる技術や作物を害虫の被害から守る農薬の知識などを身につけることによって、収穫量が増え、栄養価が高い作物がとれるようになる。質と量の向上や生産性の向上のためにも、教育を受ける機会を増やすことは重要だと思う。

国連大学：チャドなどでは女性が胎児を生むだけで亡くなってしまふというケースが数多くある。このことを妊産婦死亡といい、アフリカなどの貧国では妊産婦死亡率の高さが重大な問題と化している。

その理由としては、医者が少ない、教育が良くない、紛争や内戦が相次いで発生しているなどがあげられる。また、早期婚する女性が多く、結婚したら学校をやめて家事をしたりする。そのため女性の社会進出がはばまれ、女性は育児・家事などの家庭内労働者としてしか見なされないケースが多い。

女性が教育を受ける機会が少ない家庭は「女は家事や育児をやっていればよい。学校なんかに行く必要はない」というような考え方をする親が増える。その親はまた子供たちが教育を受ける機会を奪う、というように、親から子へ教育の機会を奪う連鎖が起こる。

その結果、女性の人権侵害がおこり、基本的人権が脅かされつつある。このような負の連鎖を止めるためにも、教育を受ける機会の増加と共に、女性のエンパワーメント（内発的な力の開花）を促進していくための新しい法律を確立していくことが必要であると確信する。

創価大学講義[佐々木先生]：ザイール（現在のコンゴ）の難民キャンプでは穴を掘っただけの原始的なトイレを使っており、難民キャンプで生活する人たちはとても不衛生な状況で生活を営んでいる。

このような不衛生な環境が原因で子供たちは、下痢や栄養失調、マラリアや麻疹といった病気にかかっている。これらの病気は、衛生状態の改善によって予防出来るものであると分かっているが、それでも現実には改善されていない。

自分は、衛生状態の改善には上下水道の整備が大切なのではないかと考えた。トイレが不衛生な状態から改善されることはとても大事であるが、それと共に、できるだけそのまま飲めるような、細菌の入っていない飲み水を確保することが大事だと思ったので「安全な水を供給するためにはどうすれば良いか」と質問した。この質問に答えてくださったことがすごく嬉しく興味深かった。

講師の先生が教えてくださった回答によれば、難民の生活を向上させるために必要となる基本は、誰でも考えるように、まず彼らに技術やシステムを伝えるということ。しかしただ伝えるだけでなく、なぜそれが必要なのか、その技術やシステムがあることによって、どのようなメリットが自分たちにもたらされるのかを理解してもらうことが大事なのだそうだ。

たとえば、日本から技術指導に行つて貧国に水道を作るとする。水道が開通してよかったよかったと喜んで帰国するが、数年後に見に行つてみると、水道が使われていない。汚い井戸から水をくんで生活し病気が蔓延する生活に戻っている。こんな不思議な話が実際にあるそうだ。

だから、水道というハードを作るだけでなく、その水道を使うことによって生活がどのように変わり、衛生状態が向上して病気にかかりにくくなるのか、というソフト面を教えて教育し、現地の人たちが水道を使

いこなせるようになるまで面倒を見てあげるところまでやって、はじめて技術指導が完結する。

失敗した過去の事柄から、技術指導しに行く側は教育を受けていない貧国の人たちでも分かるくらい丁寧に指導して理解を得た上で、後世に残るように目に見える形で技術を残していくことが肝心なのではないか。

創価大学講義[山口先生]：2006年7月~2007年3月。この時期に、イラクのバグダットで武力衝突があった。銃弾は空気を切り裂く乾いた音を立て、爆弾は煙を出したり雲をつくった。日本からは自衛隊が派遣され、武器を装備しながら人道支援の活動をおこなった。

このとき、山口先生は外交官として現場に行き、情報を集めていた。日本は英国や米国に嫌がられないようにタイミングを計って立ち退こうとした（出口戦略）。当時の首相、小泉純一郎は反対も多い中でこの政策をとった。最終的には成功し、これを機に日米の関係はより強固になった。

また、国際情勢についても教えていただいた。先日イギリスがEUを脱退し、テロがヨーロッパやアメリカで相次いでいる。その背景は、イラク問題から考えていくと分かりやすい。民主化した武装勢力が混在していた中で、民族や思想の違いから争いが生まれた。イスラム国（IS）が事件を起こすとイラク・シリアなどから逃げようとする人々が出てくる。

亡命した人々はヨルダンやトルコへ難民として移住する。しかし移住した先で安定した食料や水を得られず困難な状況に陥った場合、先進国に第三定住しようとした移動を開始するが、外国人嫌悪（ゼノフォビア）の国はそれを受け入れない。それが近年でいうイギリスである。

もし自分が日本国政府に意見できるならば、中東地域の様子を見て恐れるのは分かるが、国際社会に投資する資金をもう少し難民の受け入れにまわして、難民問題に協力的になっても良いのではないかと言いたい。

外務省：SDGsは3~4年かけて交渉されたのち採択された。採択された2015年9月当日はニューヨーク全体が祝して建物やカフェの看板、Googleがデコレーションされた。そのような中でイギリスがEUを離脱し、会議では金融の不透明さが表れた。

アジア欧州会合(ASEM)の外交政策では開発協力、所得の低い国の女性の地位を向上させることなどが確認された。貧困区では治安が悪化しやすく、お金を所持していると思惑・宗教的考えからテロが発生しやすくなる。国際機関が財政的に裕福であればそれを未然に防ぐことも可能であるかもしれないが、実際それだけの資金はない。

日本は現時点で、国際機関に多額の投融資をしていると聞いた。

金銭面で考えると、これ以上はどうすることも出来ないかもしれないが、創立者池田先生がおっしゃるように対話で平和の波を広げていくことは出来るはずである。

これは日本に限らず世界中どの国でも実行できると感じる。

国会：現在の国会議事堂は昭和11年（1936年）に建てられた。中央塔から向かって左側が衆議院、右側が参議院と左右対象になっている。

参議院第一会議室は、昨年の安全保障関連法案の際に議事が荒れてマスメディアにも取り上げられた有名な場所である。

参議院本会議場では参議院本会議が行われ、議員全員が出席し、議院の意思が決定される。

御休所は天皇陛下が国会の開会式当日などにお入りになれる場所である。御休所製作経費は当時の総予算の1割が投入されており、入り口の大きな石は大理石の一枚板を丁寧にくり抜いて造られている。

中央広間は中央塔の真下にあり、天井まで約32メートルで吹き抜けになっている。これは奈良法隆寺の五重塔がすっぽり入る大きさである。また、日本国の議会制度の基礎をつくった3人の政治家「大隈重信、板垣退助、伊藤博文」の銅像と、銅像のない台座が1つある。政治は常に理想を追求すべきであり、まだまだ道半ばということ、それとともに銅像になっている3人を超える政治家が出てくることを期待して台座があげられているようだ。

平和祈念展示資料館：戦時中・戦後、幾多の激闘を乗り越えた体験者の証言と労苦を感じさせる写真付きパネルが何枚も展示されていた。「兵士」「戦後強制抑留者」「海外からの引揚者」と大きく3つに関連する事柄が描かれていた。戦争が始まった初期は20歳男子を中心に徴兵が行われていたが、後期になると40代（当時の高齢者）までもが戦場へ行くこととなった。赤紙を「おめでとうございます」と渡されると家族を残し、国のために戦う義務を課せられた。家族は、千人針の日の丸といったお守りを作り、泣く泣く見送った。

戦後になると、戦場に残された人々や移り住んだ人々は57万5000人にまで及んだ。その人達は、シベリアなどの酷寒の地で乏しい食糧で生活していた上に、強制労働まで強いられていた。また、暖かい毛皮を売ってまでしないと食料不足で餓死してしまうほどだった。

資料館の方から伺った話によれば、約355万人が海外に取り残され、最終日本に生還できたのは約320万

人。栄養失調で女性や子供が苦しんだという。飯を貰っても嬉しい顔をする余裕もなく、子供は皆やせ細っていた。

現在、日本の生活水準は世界的に見てとても裕福である。戦時中の生活を思えば、毎日三食ご飯を残さず食べることは当たり前なのではないだろうか。さらに感謝していく必要があると思う。

戸田記念国際会館：本年 5 月 23 日・24 日にトルコのイスタンブールで史上初となった世界人道サミットが開催された。準備は 3 年前から開始された。当日は世界中から約 9000 人が集まり、国際機関や NGO 関係者、難民や避難民など人道危機の影響を受けている人々が参加した。SGI も招待され、「人間の復興」と題して人道展をしたり、ワークショップでは熊本地震の報告をしたりした。SGI の地域をベースとした活動、人対人の対話などが評価され、マーシー・マレーシアという NGO のジェミラ マフムード元代表も訪れた。

サミット自体は『長期化した人道危機のなかで、どのようにすれば一人でも多くの人を救っていいのか』ということを中心に議論が進められた。コミットメント（公約）の表明を促した場でもあった。いくつかコミットメントは発表されたが、難民の発生地、起源となっている元々の国が会議に来ていないことが問題視された。次は 9 月の国連総会に向けて準備が進められるようだ。

しかし、宗教や民族に関係なく議論できるのは良いことであり、そのような場が設定できたこと自体が大きな前進だろう。今後も継続してサミットを開き、世界全体を通じて同じ目標を決めていくことが問題解決に繋がると思われる。このような機会をさらに設けて平和を推進していくべきだと提案したい。

## **6. 自分が思っていたことが正しかったか、間違っていたか、自分の今後についての意見**

テレビのニュースなどを見ていると、難民や貧困という言葉をよく耳にする。カカオ農園で働いていてもチョコレートを食うことができないガーナの子供達、1つ 15 円のサッカーボールを 1 日に 2~3 個売って生きているパキスタンやインドのストリートチルドレン。悲しそうにしている映像を見ると自然と悲しみに同調してしまう。だから、生きることを幸せに感じていない人々が多いのだと思い込んでいた。

しかし JICA や国連大学で伺った話によれば、開発途上国は着実に発展し続けていて、何もないのに大人までもがなぜか笑っているという。このような現実、自分が想像していたのとは全然違っていった。

本当の幸せ・幸福とは、お金や資源があって豊かに暮らせるということだけではなく「今いる環境で精一杯生きていけること」が本来の意味なのではないかと思った。人間は相互に依存し合わねば生きていけない。だからこそ将来は困っている人の支えになっていきたい。また、苦しむ人を救っていきたい。

## **7. フィールドワーク、全体の感想**

事前学習から念を入れていろいろ調べていたので、難しい講義も割にすんなり理解できました。東京都内での歩行距離が長かったので結構疲れましたが、とても有意義な三日間でした。

また、開発・国際貢献の分野に興味を持てた最高の機会となりました。この切っ掛けを与えて下さった方々、フィールドワーク中お世話になった全ての方々に対して感謝の気持ちが尽きません。

今回新しく知ったことを忘れないように、自分が学んだことのすべてを周りの人たちに伝え広めてまいります。

難民問題をはじめ、深刻な現実問題の数々を知って衝撃も受けましたが、これらの問題の中のたった 1 つであっても、何か問題解決に貢献していきたいと決意できました。

本当にありがとうございました！